

笑輝賞の創設

3つの素敵なエピソードから生まれました

笑輝

第6号
加賀中学校
校長室

笑輝賞とは？

突然ですが、この度「笑輝賞」という賞を創設することになりました。思い立った理由は単純で、着任以来、生徒たちの心温まるできごとがいくつもあったことです。

まず、校長だよりも使用している笑輝(しょうき)とは何かを共有しておきましょう。笑輝とは、令和元年、3代目校長である藤原文明校長先生の時に、それまで体育会、文化祭と呼んでいた学校行事名を、より生徒が親しみやすく、愛着がわく名称にしようということから生まれた言葉です。

具体的には、当時の生徒会が中心となり、伝統として残していくネーミングを考えたとす。そこで出た意見が、全ての生徒の笑顔輝く学校でした。そうです。先輩たちは、加賀中学校をさらに笑顔輝く学校にしたいという思いから、笑輝祭としたのです。(藤原校長先生に教えてもらいました。)

その結果、体育会を「笑輝祭・体育の部」、文化祭を「笑輝祭・文化の部」と呼ぶことにしたのです。私も、笑輝に、笑顔輝く学校にしたいという思いが込められていることに感銘を受け、校長だよりも笑輝にしました。

次に、笑輝賞の創設を思いついた背景には、生徒たちの心温まったできごとがあります。では、どのようなできごとがあったのか、次に紹介したいと思います。

さりげない譲り合い

4月、西日に照らされた下校時刻のスクールバス乗り場でのできごと。その日は予想以上の生徒がスクールバスを利用することになり、ある方面のスクールバスの車内は一瞬で満員になってしまいました。「どうしよう、乗れないかも・・・」。困惑する後輩たちの声が聞こえる中、数名の女子生徒たちが顔を見合わせ、そっと列を離れました。「私たちはいいから、みんな先に乗って帰って」。彼女たちは、他の生徒に座席を譲り、自分たちは親に迎えを頼むことにしたのです。

誰かの「困った」を自分のことのように捉え、そっと手を差し伸べる。夕暮れのバス乗り場に残された彼女たちの笑顔は、沈む太陽よりも温かいものでした。

力は人のために使うもの

修学旅行の那覇・岡山空港でのできごと。到着ロビーのターンテーブルの上で、無数の同じようなキャリーバッグが流れていました。自分の荷物を探すだけで誰もが大変な中、数名の男子生徒たちの動きは違いました。彼らは流れてくるバッグに付けられた、旅行タグをじっと見つめ、「あ、これ加賀中生徒のバッグじゃん」「これも取るよ」と、次々に仲間の荷物を抱え上げていったのです。

旅の疲れも見せず、自分の力を、迷わず誰かのために使う。彼らが手渡したバッグの数だけ、そこには思いやりという目に見えないお土産が詰まっているように見えました。

親善大使たち

修学旅行、那覇市内での自主研修のできごと。男子生徒の班に一人の外国人が声をかけてきました。とても困った様子で、「パスポートをなくした。公衆電話はどこか。」という必死の訴え。生徒たちは言葉の壁に戸惑いながらも、公衆電話を探し出し案内しました。しかし、運悪くその公衆電話は故障中でした。それでも彼らは諦めず、次の救済手段を考えました。近くに県庁があるはずだから、そこまでいけば何とかなるかも、と考え近くの県庁まで外国人を案内したのです。そして、無事に県庁職員へ引き継ぐことができました。

外国人は、彼らの親切さに感謝のしるしとして「お菓子でも買って」と、数千円のチップを渡しました。

自由時間を削って、また、慣れない土地で、言葉の通じない人に対して・・・全ての逆境をチームワークと優しさで跳ねのけました。仲間と食べたアイスは、おいしかったに違いありません。私も、学びたいできごとでした。

以上が、笑輝賞を創設したいと考えた素敵なできごとです。

今後、賞状の準備ができ次第、3つのできごとに関わった生徒を表彰したいと思えます。そして、たくさん生徒のよい行動を見つけないと思っています。生徒のみなさん、自分がされて嬉しいことを大いにする大人に成長してください。

保護者・地域のみなさんも、校外で加賀中生の心温まる素敵なできごとを見かけましたら、加賀中学校長までご連絡ください。取材に行かせていただきます。